

明治時代のドイツ留学生

—前田令太郎の写真帳より—

高際麻奈未

東京薬科大学史料館／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

東京薬科大学の前身である私立薬学校の初代校長・下山順一郎とそれに次ぐ東京薬学専門学校の初代校長・丹波敬三関連の史料を収集している際に前田家から出た写真帳を古書店より入手した。写真帳の主は明治・大正時代の医師、前田令太郎である。万延元（1860）年、京都の医師である前田周造の長男として生まれ、京都府立医科大学の前身である角倉洋学所のドイツ語教師であったルドルフ・レーマン Rudolf Lehmann の教えを受けていた。前田の写真帳には彼が当時ドイツ領であったストラスブール大学（現フランス）の医学部に留学した際に指導を受けた教授陣やストラスブールの風景、ドイツでの遊学時の風景など留学生活に関係した写真が多く収められていた。その中の一枚に前田と同時期にドイツに留学していた日本人学生の集合写真がある。本研究ではこの写真に注目し、写真に写る学生たちについて調査を行った。

集合写真には高橋順太郎（明治14年度文部省留学生）、濱田玄達（明治18年私費留学のうち文部省留学生）、弘田長（明治18年私費留学）、下山順一郎（明治16年度文部省留学生）、丹波敬三（明治17年私費留学）、飯盛挺造（明治17年私費留学）、前田令太郎（明治18年私費留学）の7名が写っている。丹波と飯盛については森鷗外と同船でドイツへ向かい、『航西日記』の「日東十客」で知られる。前田による写真の裏書に「明治十八年八月二十八日、於斯堡（ストラスブール）写之」とあることから撮影日が推測されるが、それぞれの学生の留学期間、留学先は同一ではない。なぜこの集合写真を撮影するに至ったか、留学生同士の関係性についても検討を行った。

留学先の大学の学籍登録簿を調査したところ、この時にストラスブール大学に籍があるのは高橋、濱田、弘田、下山、前田の5名であった。これらの学生は高橋が明治17年にドイツで結婚後に転居したと考えられるものの、下宿先が一緒であるという共通点が見出された。

さらに乗船者名簿を調査した結果、集合写真の撮影日は高橋の日本への帰国直前の時期であったことがわかった。飯盛は学術発表がこの年の9月にストラスブール大学で予定されており、友人である丹波を伴ってストラスブールに集まった可能性が示唆された。当時の留学生同士の連絡は書簡などを通じて、お互いの交流が行われていた様子がうかがえる。また当時のドイツの交通事情については鉄道網が現在とはほぼ変わらない程度に完成されており、国内の移動は難しくなかったようであるが、運賃は決して安いものではなかった。

当時、公費留学した学生は帰国後に大学に報使することが決められていたため留学生の多くは帝国大学研究室の初代教授となり、黎明期の日本の近代医学・薬学を支えた。高橋は薬物学初代教授、濱田は産婦人科教授、下山は生薬学初代教授となっている。私費留学した弘田は小児学教室初代教授となった。下山と共に薬学科教授となった丹波は日本における裁判化学の草分けとなり衛生裁判化学を担当し、飯盛は私立薬学校で物理学を教えた。前田は京都に戻り医院を開業している。高橋と下山による抗結核薬ファゴールの作製は、留学での繋がりも少なからず関係しているだろう。

下山と丹波は医学校製薬学科（現東京大学薬学部）での学生時代、留学後の東京帝国大学および私立薬学校での教授時代を共に過ごしているが留学先で一緒に写る写真は他にはなく、極めて貴重な史料であるといえる。前田の写真帳に収められているストラスブール大学の教授陣は集合写真に写る学生以外の日本人留学生も共通して指導を受けていた可能性が考えられる。ドイツ留学後に東京帝国大学の初代精神病学教授となった榎俣をはじめ前田と交流があったと思われる日本人の写真も残されており、今後とも彼らの活動と交流関係について調査を続けていきたい。